

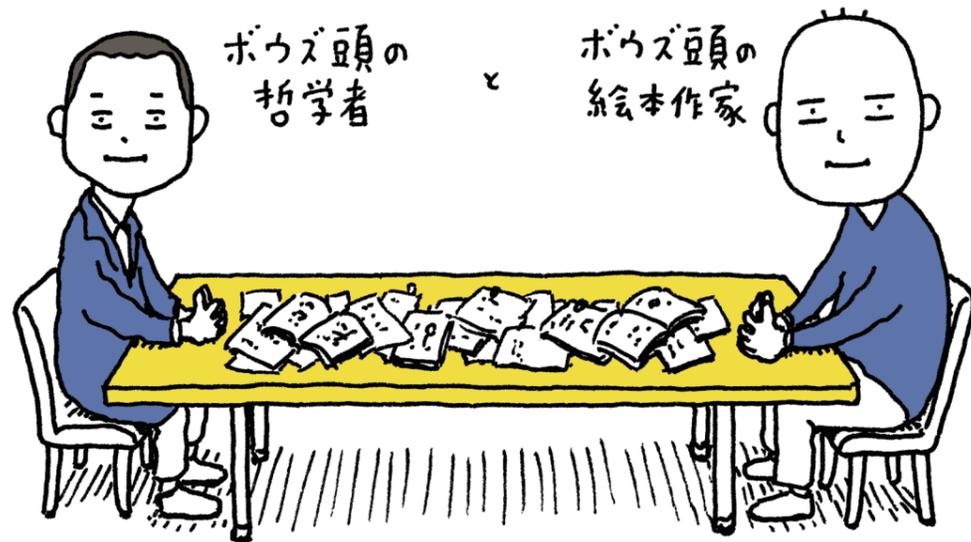
特別企画対談

ヨシタケシンスケ

×
苦野一徳

「なんだろう」って、 なんだろう

小・中学校「道徳」教科書掲載「なんだろう なんだろう」の筆者ヨシタケシンスケさん。
新版教科書に、本質観取をテーマにした教材をご提案くださった、哲学者の苦野一徳先生。
光村図書の道徳教科書『きみが いちばん ひかるとき』で出会ったお二人に、問うこと、
そして子どもたちの未来について語り合っていました。



苦野一徳 とまのいっとく

1980年兵庫県生まれ。熊本大学大学院教育学研究科准教授。専門は哲学、教育学。著書に『愛』（講談社）、『学問としての教育学』（日本評論社）など多数。光村図書 小・中学校「道徳」教科書編集委員。

ヨシタケシンスケ

1973年神奈川県生まれ。絵本作家。絵本や児童書の挿絵、イラストエッセイなど多方面で活躍。光村図書からは絵本「なんだろう なんだろう」、エッセイ「日々臆測」を刊行。

「なんだろう なんだろう」 と本質観取

苦野 哲学における「本質観取」って、物事の本質を洞察して、みんな言葉にして編みあげていく行為なんです。ヨシタケさんの「なんだろう なんだろう」を拝見したとき、いろいろな事例、具体例を挙げていって、そこに共通するものから、「〇〇とはこういうものだ」という、みんなが納得できる言葉を見つけようとする手順が、本質観取と全く同じだと思ったんです。

ヨシタケ 「なんだろう なんだろう」をかくときに、僕の中でルールとして決めたのは、正解が一つだと誤解されない表現を旨とすることだったんです。例えば、「友達って大事だね」と言われても、結論がぼんやりしてしまって、「はあ」としか言えないんですよ。

苦野 そんなメッセージ、いらないですよ。

ヨシタケ 正解はこれだと言い切らず揺らがせていくことと、苦野先生がおっしゃっていたような「具体性」を表現することがいちばん大事だと思います。例えば「友達」みたいな概念って、大人でも子どもでも、具体的な出来事からでしか、抽出できないはずなんです。

苦野 そうですよ。

ヨシタケ 絵と言葉で、「例えばこういうこと」というのを具体的に言われて初めて、「俺だったらこうだな」っ



て頭が動きだす感覚になると思っています。

苦野 なるほど。

ヨシタケ それを大事にしながら、「みんな」など大きな主語を使わないことや、「絵本に出てくる子たちにとってはこれが大事なんだろうな」というのを思ってもらえる、共感のようなものを描かないと、ついてきてくれないだろうなど。おそらく、言葉で本質に迫るということの手順と、僕の注意する部分とが、似ている気がするんですよ。

苦野 そうですよ。その具体例が本当におもしろいんです。すごく具体的ですごく個別的なことを掘っていくと、なぜか普遍に到達することがある。そこに子どもたちも「そうそう」ってうなずけると思うんですよ。

ヨシタケ うれしいですね。

二つの問い

苦野 今回の対談、私は“わくわく”ベースの問いをもって来たんです。

ヨシタケ “わくわく”ベースの問いとは？

苦野 「問い」って、大きく二つの思いから発生すると思っています。私の場合、多いのは、不安。「なんでこんな苦しい思いをしなきゃいけないんだ」といった、焦りからくる問いが多いんですが、それってしんどい

んですよ。

ヨシタケ 僕も基本、不安からくるものばかりですね（笑）。

苦野 もう一方で、今日みたいに、“わくわく”からくる問いもあると思うんです。哲学用語だと、「エロスの予期」っていうんですけど。この不安と“わくわく”の二つが人の問いの二大ドライバーになっていると思っています。

ヨシタケ 確かに言われてみれば、問いは不安からくるものだけじゃないなというのを、今思っ、びっくりしています。

苦野 これだけ子どもの世界を描いているヨシタケさんでも、不安みたいなものがベースにあるんですか。

ヨシタケ 僕の場合は、全て不安発ですね。「毎日、スケッチとか描いていて、楽しいでしょう」みたいなことを言われることもあるんですけど、楽しい人ってこんなわざわざ描いたりしないんですよ。

苦野 なるほど（笑）。それを聞いて安心しました。私も書いたり読んだりしていないと、いつも不安につぶされそうなんですよ。でも最近、先ほどのエロスの予期ということを意識するようになっていて、今日はどんな“わくわく”があるかなあと、そっちに意識的に向かっているところはあります。

ヨシタケ なるほど。



苦野 少し教育寄りの話をすると、「教育」を変えていかなければいけないという動きの中でよく言われるのは、「この国はもうやばい」という、不安ベースの話なんです。子どもが食いっぱぐれるとか、世界から取り残されるとか。

ヨシタケ 脅かすのは簡単だし、誰でもできるんですよね。

苦野 そう。でも、「それって長い目で見たらうまくいかないですよ」と、

よく言っているんです。「こんな学校やこんな教育の未来になったらわくわくしますよね」「そういう“わくわく”をかき立ててくれるビジョンを描きませんか」っていうのを、自分の本では書いています。

ヨシタケ 「なんで勉強しなきゃいけないのか」という問いに対して、「最終的にそうしないとおまえが生きていけないんだよ。生きていけなくなるんだよ」という答えが、よく言われます。でも、もう一つ言い方があって、「なんで勉強しなきゃいけないの?」「一人で餌を取れるようにならなきゃいけないの?」という問いに対して、「自分で餌を取ると、めっちゃ楽しいんだよ!」っていう答え方もありますよね。

苦野 そう! それなんですよ。

ヨシタケ 「あれちょっとやってごらん、楽しいから」みたいな選択肢がすごく少ないように感じています。脅かしたほうが即効性はありますが、長い目で見たときに、人って“わくわく”でしか動かないですよ。

苦野 そう思います。

ヨシタケ どちらも大事なんだけれども、両方あるということを、繰り返し言うていく必要があるんじゃないかと思っています。片方だけしかないわけじゃなくて、“わくわく”で動くときと、不安で動くときと、「それを使い分けるよ。今はどっちかな」って、子

もに選択肢がたくさんあることを教えるのが、大人のやるべきことなんだろうと思いますね。

問い方の訓練

苦野 ヨシタケさんは、問い方は訓練でうまくなるものだと思いますか。私は少なくとも自分で訓練した記憶はないんですが。

ヨシタケ 僕は自主開発をしたので、「はい」とは言います。ある程度のマニュアル化はできます、と。基本的に、僕は理詰めで絵本を作るので、例えば、「りんごの色を変えてみたらどうだろう」とか、「大きさを変えてみたらどうだろう」とか、いろいろな軸を変えて見ているんです。

苦野 おもしろいですね。確かに、そういう発想をちょっと知るだけで、問いが次々生まれてきそうです。

ヨシタケ どういう考え方をすれば問いが生まれるか、というのはある程度マニュアル化できるし、共有も、みんなで同時にやることもできるはずなんです。あとは慣れで、いったん癖がつくと、あれこれ考えだすんですよね、どんな人でも。

苦野 なるほど。

ヨシタケ その「最初の問い」をみんなではじくり返すというか、練習してみるというのはすごくいいと思います。仮に「最善の問い」を100点満

点とすると、75点ぐらいの問いはみんな、練習で作れると思うんですよ。「センスのある問い」って、よく言われますけど、それは、80点、85点ぐらいの問いだと思うんです。

苦野 哲学は、8割ぐらいが問いの立て方で勝負が決まるところがあって、本質的な問いの立て方と、どこにも行き着かない問いの立て方というのがやはりあるんですね。お話を伺って、本質的な問いの立て方って、確かにある程度は訓練でできるものだなというのはすごく思いました。

ヨシタケ そうですよ。

苦野 哲学の歴史は、人類がさまざまな思考に失敗する中で、本質的な問いの立て方を見つけてきた歴史でもあります。そういう意味では、「問い方にはコツがある」「それは練習で、ある程度身につけられる」と言われると、確かにそうだなと思いました。「問い方の訓練」というものを意識したことはなかったんですけど、言われてみれば、自分もそういうことをやってきたのかもしれない。

答えなくてもいい問いもある

ヨシタケ そうですね。我々は、自然に問い方のコツを見つけていったタイプですけど、それは練習することで、何かしら作れはすると思うんです。まあ、問いは、立てたい人が立てればいいとは思いますが。そもそも「問い」ってあればいいわけではない。問いの中には間違った問いがたくさんあるんですよ。

苦野 はい。

ヨシタケ 「問いを立てられなくてもいいけど、あなたが問われた問いが、問いとして正しいかどうかを判断できたほうがいいよね」ということは、



言っておいたほうがいいと思うんですよ。

苦野 それでいうと、ヨシタケさんの「なんだろう なんだろう」は、いちばん大切な問いかなと思っています。「そもそも」を考えないと、やっぱりとんちんかんことをいっぱい考えてしまうので。

ヨシタケ 子どもたちに今後言っておくとしたら、「いろんな問いを大人たちから投げかけられると思うけれども、その中には答える必要のない問いもいっぱいあるんだよ」ということ。それを、最初に言っておきたいし、僕も言っておいてほしかったなと思います。

苦野 哲学の場合は、答えを次世代に受け継いで、もっといい答えを更新していくんですけど、「そもそも」に対する問いをもち続けないと、どうしてもピントの外れた方向に行ってしまう。それは、答えるに値しない問いだとも言えますね。

ヨシタケ 考えていて楽しくなる問いと、切羽詰まってくる問いの二種類があると、みんな感覚でわかると思うんです。そういう「自分が脅かされているように感じる問いについては、考える必要ないんだよ」ということを教えてあげたいし、そういう問いよりは、「自分で自分をわくわくさ

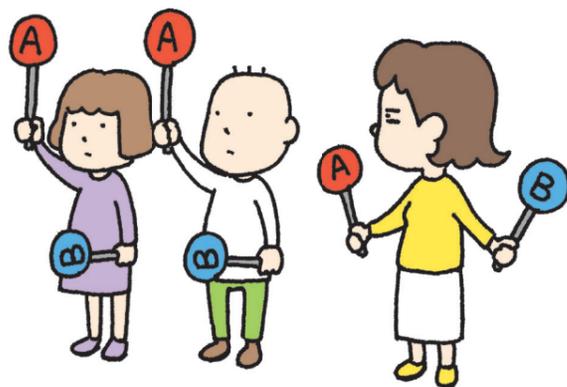
せる問いって作れるし、作ってもいいんだよ」って、子どもたちには教えてあげたいですね。

自分を嫌いなまま生きてもいい

苦野 少しテーマを大きくして、未来の話をしたと思います。私の中では、戦争はどうやったら減らしていけるのかというのが、一つ、大きなテーマとしてあるんです。

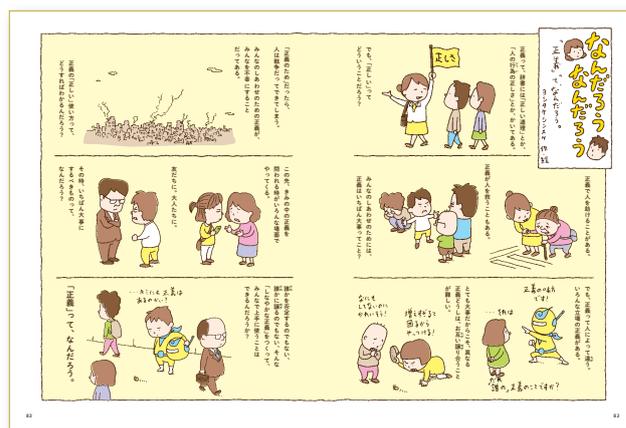
ヨシタケ うんうん。

苦野 哲学の歴史の中で、いちおう、それに対する一つの筋道は見えてきたんですね。自分の自由ばかり主張し続けていたら、いつまでたっても争いは終わらないから、「お互い対等で自由な存在だよ」と、まず認め





苫野先生からのご提案をもとに教材化したページ
(2年「尊重の本質を探ろう」p.128-129)



ヨシタケさんに描きおろしていただいた
「なんだろう なんだろう」のページ (1年 p.82-83)

合うというルールを共有しようということ。それを哲学では、「自由の相互承認の原理」といいます。

ヨシタケ お互いを認め合うというのは、まず一つのゴールですね。教科書的にも、教育の枠の中でも、「自分を認めてもらうために、少し我慢して他人を認める」ということを、目ざさざるを得ないと思います。それは、未来に願うことの一つですね。

苫野 そうですね。

ヨシタケ そのための順番として、他人を認める前に、「自分を認める」というステージがあると思うんですが、別に自分を嫌いなまま生きていてもいいんだ、だましましやってもいいんだなというところから、世界が始まる人もいると思うので、落としどころをたくさんつくっていくのが、未来をつくっていくということなのかなとも思います。

苫野 その考え方はとても新鮮です。

「自己肯定感を上げよう」とか、「もっと自分を好きになろう」とか、そういうことばかり言われるじゃないですか。

ヨシタケ それなのに自分を許してあげられないからつらいんですね。結果が出せないから、さらに焦っていく。僕もずっとそれで苦しんでいて、これはそもそも、「自分を認めてあげること」をゴールにすることが間違っているんじゃないかと、ふと思ったときがあって。

苫野 なるほど。

ヨシタケ それを認められないと失敗なのだとしたら、自分は失敗だなんて思ったんですよ。だから、全員を「失敗じゃない」とするには、どうすればいいんだろうと思ったときに、「嫌いな自分に慣れることも自己肯定の一つだな」というストーリーを作っていくのが、大事な気がしています。

苫野 先ほどの、生き方の選択肢を増やすという話ともつながりますね。

ヨシタケ 自分が望んでいないことが起きたときに、それをどう受け入れるか。いい諦め方というか、一つの事実を受け入れるためのストーリーをたくさんもっておくに越したことはないですね。

苫野 そのとおりだと思います。

ヨシタケ だから、未来を生きていくうえで、そんなストーリーをたくさん用意していきたい。その中で、「自分を嫌いなまま生きている人って、けっこういるんだよ、俺もそうだよ」と言いたい。「自分のことは嫌いだけど、もう変えられないもん」っていうのも、一つのストーリーになるし、「自分を認めてあげられたら、そっこのほうが楽しいけど、それ、毎日できる人もいないんだよ」というストーリーも用意したいと思います。

苫野 「自分を嫌いなまま生きてもいい」って、なんだか、すごい言葉をいただきましたね。



お二人の対談を
動画で楽しみたい方は、
こちらから。

